



瀬賀 範真さん(津島)

取材者：浪江町役場 三瓶・嶋原
取材日：10月8日

自分を見つめて、 いい方向に考えなくてはいけない

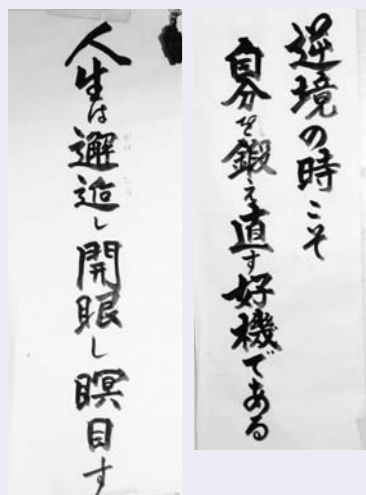
平成23年8月号のころ通信で“先の見通しが立たない現実にも、慌てないでと心がける”と話されていた瀬賀さん。二本松市内の仮設住宅での暮らしも4年になりますが、昨年からの自治会長のほか、いろいろな役職も引き受けられてスケジュールに空きがないほど忙しい日々を送っていらっしゃいます。気負いする様子もなく、ごく自然体で、より良いやり方を工夫しながら取り組む前向きさと笑顔、気さくさで皆さんに頼られる存在です。



▲帰れるものなら津島に帰りたかね、と笑顔でお話くださった瀬賀さん

震災のため挙式を延期した長男も結婚して仕事の関係で山形に住み、孫が2人生まれました。青森の長女の所と合わせて孫は3人になります。コスモス保育園に勤めていた次男は福島市で保育士としております。津島では、食品と雑貨を扱う瀬賀商店を家内と母が、山の木を切って販売する仕事は私がやっています。震災後に運搬用のトラック等は全て廃車になりました。津島なら仕事は次々と来ていたけれど、こんなになっただけならいいね、と考えてもしょうがないことは

いちいち考えない。過去を振り返らず、前向きに考えないといけないと思っています。
“人生は邂逅し開眼し瞑目す”
逆境の時こそ、自分を鍛え返す好機である。津島稲荷神社の宮司さんに書いてもらった言葉が気に入っています。自分を見つめて、良い方に考えてなくてはいけません。どん底にいる時こそ、自分を見極めて一つひとつやっていけば運が向いてくる、という意味だと思っています。
私が住んでいる安達仮設は世帯数が200ほど、約400人が暮らす、浪江では一番大きな仮設です。自治会長は2年目です。ここは、毎日いろいろな行事があるのでイベントにはできるだけ顔を出しています。きちっとするばかりでなくて、お酒を飲んで踊ったりもして楽しくやっています。自治会長をして良かったことは、津島の人だけでなく、いろいろ



▲「長い人生のなかでは、いろいろな人と出会いめぐり合い、少しずつ成長しながらやがては一生を終る」という意味が込められているそうです。

浪江の ころ通信

・第53号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のころ通信」が編集・発行されます。

浪江のころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のころ通信／第53号」への感想をお寄せください。
【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のころ通信」宛
FAX.0243(22)4218



浪江のこころプロジェクト

取材協力者情報交換会を開催しました

「浪江のこころ通信」は、取材と原稿執筆をお願いしている全国各地の取材協力者の皆様のご協力により発行されています。9月26日～27日の2日間、取材協力者が集まる情報交換会が開催されました。現在の町の復興の様子を視察していただいた上で、通信の現状と課題について共有し、今後の通信のあり方について意見交換を行いました。

1日目 町内視察

バスで浪江町内を回り、復興事業の様子について視察しました。



●仮設焼却施設（棚塩地区）
施設事務所内にて担当の方から仮設焼却施設の説明をいただき、バスで施設を見学しました。



●大平山霊園（請戸地区）
～除染廃棄物等の仮置場（高瀬地区）



●水稲の実証栽培の様子（酒田地区）



●NPO法人JIN 圃場（幾世橋地区）
団体の取組みについて説明いただき、圃場を見学しました。



●浪江駅周辺

●浪江町役場（本庁舎）
町の担当者より、役場内の執務の状況や、除染の進捗状況等について説明を受けました。

2日目 情報交換会

まず、町の復興状況や浪江のこころプロジェクトの進捗状況について、担当者から情報提供が行われました。その上で、取材を通して感じていることや、取材する上での課題、今後に向けた提案等について話題提供をいただきました。

- 話題提供者■
柴田 裕美
(特定非営利活動法人山形の公益活動を)
応援する会・アミル
古山 郁
(特定非営利活動法人
市民公益活動パートナーズ)
三瓶さやか
(浪江町役場復興推進課情報統計係)
- 進行役■
櫻井 常矢
(「浪江のこころプロジェクト」プロジェクト)
リーダー、高崎経済大学教授

取材を通しての印象

●これからの生活のことについては、まだ話しくいのか、と感じることがあります。浪江に戻る戻らないどちらにしても、自分なりの形で浪江の絆を大切にしたいと思っているという言葉を最近お聞きしました。皆さんそれぞれに、ふるさとのことを想ってお暮らしなのだと、ということが伝わってきます。

●以前は自分や家族の生活で一杯という話を多くお聞きしましたが、最近では、浪江のために何か役に立っているのでは、と行動している方も増えているように思います。一方で、まだどうしたらいいかわからない、途方に暮れているという方も増えている感じも受けます。

●この先どういう風に人生が変わるか分からない中で、お気持ちの変化、生活環境の変化も大きくなっていると思います。そういった複雑な想いを抱えている中で、ご自身の気持ちを整理して「浪江のこころ通信」の取材を受けることのためにがんばっている方もいらつしやるのかなと感じています。

●一方で、取材の申込みで電話をする、「いつか電話がくるのでは」と取材を待っていた方もいらつしやいます。根気強く取材をお願いするための電話がかけをしていきたいです。



●取材の進捗や復興の状況について、町民の皆さんの生の声、想いを伝えていくことができるのは、町の広報としても大切ですので、「浪江のこころ通信」は継続していくべきだと考えています。



●浪江町に戻って事業を再開された組織や事業所も増えているようですので、そういった方々のお話を伺いたいです。

●こちらから取材をお願いするだけではなく、記事を公募するような取組みも考えたいと思います。

●「浪江のこころ通信」の特徴は、皆さんの想いに寄り添って聞き出し役になっていることだと思っています。そういった想いをまとめて他の方にお伝えすることも大切な役割だと思えます。状況が変わっていく中でも、通信には状況に沿った役割があると感じています。

これからの通信への期待

●全国で行われている交流会や、町の復興支援員の取組みなども連携できると、もっと展開していけるのではないかと思います。

●記事の公募については賛成です。これからの町を担う子どもたち

紙面へのアイデア



●この声をもっと聞いてみたいです。

●「〇〇さんから△△さんへ」といった紙面上でのコミュニケーションが図れる試みはどうでしょうか。

●学校の同窓会や、お盆・お彼岸のお墓参りなど、人が集う機会に伺って、お話を伺うようなこともよいと思います。

●一言通信のように、短い文章で想いを伝えられるようなコーナーも、気軽に話ができやすいのではないのでしょうか。

●皆さんが語りた・知りたいのは今の生活やこれからの生活。今迷われている人の記事が、自分のこれからの生き方の参考になる。前に進めるような内容の通信になっていく必要があると感じました。

町は今回の情報交換会でいただいた声を受けて、よりよい紙面づくりについて検討を重ねてまいります。読者の皆様からもぜひご意見・ご感想をお寄せください。また、取材を受けてもよい、といったお声もぜひいただきたいと思っております。
《連絡先》復興推進課情報統計係 TEL 0243(62)4731